ガンダーラにおける仏伝図の研究

上　枝　いづみ

目次

序　論
　第一節　ガンダーラにおける仏伝図制作の重要性
　第二節　ガンダーラの仏伝図の配列と場面選択
　第三節　ガンダーラの仏伝表現の特質
　第四節　ガンダーラの仏伝図と仏伝文献
　第五節　本研究の目的と研究方法

第一部　ガンダーラ仏教寺院における仏伝図の配列に関する諸問題
　第一章　主塔円胴部を飾った一代記的仏伝表現
　　―サイドゥ・シャリフⅠ主塔円胴部の仏伝図浮彫の検討―
　はじめに
　第一節　主塔円胴部周囲の仏伝図浮彫の検討
　第二節　浮彫の年代と表現
　結びにかえて
　第二章　小塔円胴部を飾った一代記的仏伝表現
　はじめに
　第一節　小塔円胴部周囲の仏伝図浮彫の検討
　結び

第二部　ガンダーラ仏伝図における誕生場面の形成に関する諸問題
　序章
　第一節　ガンダーラにおける「誕生」の表現
　第二節　誕生伝説の背景に関する先行研究
　第三節　本研究における目的および使用する仏伝文献
　第一章　「誕生」図の諸問題
　はじめに
　第一節　「誕生」図、「誕生・七歩」図の表現
　第二節　文献に現れた「誕生」図の図像的特徴
　結び

第二章　「灌水」図の諸問題
はじめに
第一節　「灌水」図の表現
第二節　文献にみる「灌水」図の図像的特徴
結び
結語

第三部　ガンダーラ仏伝図における競試武芸図形成に関する諸問題
序章　ガンダーラの競試武芸図とその背景
はじめに
第一節　ガンダーラの競試武芸図概観
第二節　文献に現れた競試武芸図の図像的特徴
結びにかえて

第一章　レスリング図の諸問題
はじめに
第一節　「レスリング」の説話概観
第二節　「レスリング」図の表現―競技者の図像の二つのタイプ―
第三節　スワート地方出土の作例
第四節　ディール地方出土の作例
第五節　ガンダーラ盆地出土の「レスリング」図像
結び
第二章　「擲象」図の諸問題
はじめに
第一節　「擲象」図と仏伝表現系統
第二節　ガンダーラの「擲象」図の表現
第三節　文献資料に記された「擲象」図の図像的特徴
第四節　『大唐西域記』の伝える「擲象」説話と象坑
結び
結語

結　論

付　録
・誕生に関連する仏教文献の記述一覧
・作例一覧

序　論

本研究は、ガンダーラの仏伝美術の特色である「釈迦の生涯」を年代に沿って連続的に表す表現傾向をとりあげて、その特徴を明らかにし、仏伝美術の伝播と展開の過程におけるガンダーラの重要性を明確化することを目的としている。

一世紀中頃から四世紀にかけて、古代ガンダーラ地方[①]では仏伝美術が隆盛し、それまでのインド古代初期美術にはみられなかった新たな場面が数多く制作された。現在のガンダーラの仏伝美術研究は、その基礎をなしたA.フーシェの研究（A. Foucher, *L'art gréco-bouddique du Gandhâra*, 3vols, 1905-51. Paris: E. Leroux）以降、浮彫の表す主題の同定をはじめとして個別的な図像学考察が主流となり、全体を見通す解明には至っていない。そして、フーシェ以来の従来の図像学的研究では、仏伝図の示す内容を解釈する際に、特定のパーリ語、サンスクリット語文献が専ら用いられる傾向にあった。

しかし近年では、漢訳文献の記述を用いることでガンダーラの仏伝図の主題の再同定や、図像の意味が明確になることが示されている[②]。さらに、仏伝を表した浮彫が寺院内で当初どのように配列されていたのかという全体の構成についても、研究が進みつつある。とりわけ、仏塔円胴部周囲に設置された仏伝浮彫の作例には一連と考えられるものが複数存在している。これらの構成をみると、(1) 釈迦の成道後の様々な教化活動や布施にまつわる説話に主眼をおく説話表現と、(2) 釈迦伝の前半部と「涅槃」の場面の前後をあわせて釈迦の一代記を表す伝記的な仏伝表現という二系統がみられる[③]。

序論では、この二系統をそれぞれ (1)「教化・神変説話表現」と (2)「一代記的仏伝表現」と呼び、比較を行い、(2)「一代記的仏伝表現」系統にこそ、これまでガンダーラ仏伝美術の特色として指摘されてきた叙事的・伝記的表現が顕著であり、ガンダーラで新たに創始された場面も多く含まれていることを指摘した。「一代記的仏伝表現」の構成は、「燃燈仏授記」や「託胎霊夢」を起点とし、釈迦が母の右脇を開いて出生する「誕生」の前後を具体的な場面によって示し、太子として過ごした宮廷での生活を「競試武芸」を中心に描き、「出家の決意」及び「出城」以降は、二、三の求道・教化場面を配した後、すぐに「涅槃」に関連する場面へ移り変わるものである。「誕生」前後を詳細に主題化し、太子時代を多彩な競試武芸図により彩るガンダーラの「一代記的仏伝表現」は、インド内部ではその後も発達せず、むしろ中央アジア、中国、日本へと伝播している。仏伝美術の展開のなかで、ガンダーラの仏伝図制作は重要な分岐点であり、その諸相解明は重要な課題である。

そこで本研究の方法として、ガンダーラの特色となる「一代記的仏伝表現」に関して、その全体構成の考察と、このうち大きな割合を占める「誕生」と「競試武芸」の諸場面の図像学的

考察という二つのアプローチを用いた。さらに、図像の解釈における文献使用にあたっては、ガンダーラの仏伝図の特徴がどのような文献に現れているのかという視点から、漢訳も含めて関連する文献を幅広く検討し、ガンダーラの仏伝美術と対応する文献の記述を指摘することで、ガンダーラ地方に流布した仏伝伝承を探ることを目指した。

第一部　ガンダーラ仏教寺院における仏伝図の配列に関する諸問題

第一部では、本研究の主眼となる「一代記的仏伝表現」の全体構成について、同一の仏塔を飾ったセットとなる浮彫群をとりあげて考察を行った。

第一章では、主塔円胴部の作例として、ガンダーラの「一代記的仏伝表現」の現存最古の例といえる、ガンダーラ北部スワート地方のサイドゥ・シャリフⅠ遺跡主塔円胴部の浮彫群を分析した。発掘報告者D.ファッチェンナは、これらの浮彫群の制作年代を一世紀中頃とみており[④]、ガンダーラ美術の最初期相に属する作例である可能性が高い。

サイドゥ・シャリフⅠ主塔円胴部の仏伝浮彫は断片的なものしか残っていないが、主塔の円胴部を巡る全体構成の再構築によれば、当初は六十五ほどの場面が連続して配置されていたと推測され、釈迦の「誕生」に関する場面の連続である【誕生サイクル】や、太子時代の【宮廷生活サイクル】、「草刈り人の布施」など成道以前の【求道サイクル】の場面が半分を占め、教化場面は少なく、その後【涅槃サイクル】に直結したことが想定される。仏伝美術制作の早い段階で「一代記的仏伝表現」が成立していることは、仏像の起源のみならず、仏身観や菩薩思想の発達などの問題にも関わり重要な意味をもつと思われる。

第二章では小塔円胴部の作例に関する考察である。同一小塔を飾った一連の浮彫群としてこれまでに報告された作例に、新たに筆者が一連のものと想定する作例群を加えた十浮彫群を比較検討した。十浮彫群の比較によって導き出された場面総数も五十ほどを数える。その構成はいずれもサイドゥ・シャリフⅠ主塔円胴部浮彫群と共通性がみられ、【誕生サイクル】や【宮廷生活サイクル】の場面数が多い。

ただし、サイドゥ・シャリフⅠ遺跡主塔とその他の小塔の例では、大きく異なる点がある。小塔の十浮彫群の作例のなかには、釈迦の前世譚のうち、現世での成道が確定する「燃燈仏授記」の場面を仏伝の起点とする作例が少なからず認められることである。「燃燈仏授記」の場面はサイドゥ・シャリフⅠ主塔浮彫群には見出されず、スワート地方出土の制作年代の早い浮彫群にも確認されない。この事例は、スワート地方における仏伝図制作の最初期に比べ、ガンダーラ全域において小塔に「一代記的仏伝表現」が配されるように至った時期には仏陀観が発展していることを示すものとみなせよう。仏伝図の分析からみれば、それは釈迦の菩薩時代への関心の高まりと関連していると考えられる。

第二部　ガンダーラ仏伝図における誕生場面の形成に関する諸問題

「一代記的仏伝表現」系統の構成のうち多くの区画を占める釈迦の太子時代の諸場面について、第二部では「誕生」に関する場面を、第三部では「競試武芸」をとりあげて、各場面や図像の成立状況を探った。

第二部序論では、インド古代初期美術との比較を通じて、ガンダーラ仏伝美術ではじめて「誕生」前後の場面が具体的に物語られていることを確認した。誕生に関する文献の記述を整理し、文献に記される釈迦の「誕生」の伝承には、「出胎」を巡り大別して三つの系統があることを示し、現在の日本でも知られる釈迦の「母の右脇からの出生」はその一つの系統に過ぎない点を指摘した。

そして第一章では、「誕生」図をとりあげて考察を行った。ガンダーラの「誕生」図の特徴は、樹枝を右手で摑み、足を交叉させて立つ母のマーヤー、その右脇腹から半身を表す赤子の釈迦、身をかがめて釈迦を受け取ろうとする帝釈天という三者の図像である。

この図像の成立について、M. シュトイエは、ギリシャ神話の「ゼウスの腿から生まれるディオニュソス」を表すギリシャ・ローマ美術との関連性を指摘している。釈迦の常ならぬ誕生を描くにあたりディオニュソスの誕生の図像が重ね合わされたという見方は示唆に富むが、「誕生」図には、インド古代初期美術以来の伝承が認められることも重要である。樹下に立つマーヤーの姿にはインドの樹下女神ヤクシーの姿が投影されている。また、「誕生」図には釈迦の誕生を讃嘆して指笛を吹く男性が頻繁に表されるが、この身振りもインド古代初期美術の伝統を受け継ぐものである。

ガンダーラの誕生図像の細部に着目して、どのような文献の記述が対応しているかを検証すると、まず「右脇からの出生」がパーリ語文献には見当たらず、梵本・漢訳という北伝文献にのみみられることは興味深い。さらに、帝釈天が太子を受け取るという説話は、一部の梵本(『ラリタヴィスタラ』)、漢訳経典(『修行本起経』『仏本行集経』『方広大荘厳経』『根本説一切有部毘奈耶破僧事』)に限られる。文献の記述を精査して、ガンダーラの「誕生」図を再度観察すれば、マーヤーを支える女性像の解釈についても疑問が残る。この支える女性については、フーシェがマーヤーの妹マハープラジャーパティーと言及して以来、その解釈が踏襲されているが、文献の記述をみる限り、妹は誕生場面には現れず、マーヤーを介抱するのは天女たちである。ガンダーラの「誕生」図の支える女性も、天女の可能性が高い。

このようにみてくるならば、ガンダーラの「誕生」図は「右脇からの出生」という極めて神話的な内容を視覚化したもので、周囲を天人が取り囲む奇瑞に満ちた場面である。釈迦は超人化して描かれており、その姿は『ラリタヴィスタラ』や『マハーヴァストゥ』といった大乗的

仏陀観とも呼応するものと考えられる。

第二章は、「誕生」に続く「灌水」図に関する考察である。ガンダーラの「灌水」図は、三脚台の上に直立する赤子の釈迦の頭上に、左右に侍立する梵天と帝釈天が水瓶を執って水を灌ぐ図像である。

インド内部では龍王による灌水が主流であるのに対して、梵天・帝釈天による灌水はガンダーラの特色であり、龍王による灌水の図像は僅かに二例である。先行研究では、釈迦「灌水」図と、ローマ美術に見出される三脚台に立つ童子神像との類似性が指摘される。ただし、ここでは、両側からの二流の灌水という図像の成立にあたり、インド古代初期美術にみられる、両側の象から灌水をうけるガジャ・ラクシュミーの図像との関連性を重視した。さらに、ガンダーラの「灌水」図像では、釈迦の両側に侍立する梵天と帝釈天が必ず右手で水瓶を執る。画面左側に位置する梵天はしばしば不自然に背面観で表されており、この点も画面中央の釈迦に対して梵天の右側面を向けて右手をさしむけることが重視されていることを示している。インド古来の浄・不浄の概念および灌頂儀礼の影響が認められる。

文献の検討では、梵天・帝釈天が「灌水」場面に現れる記述は非常に少なく、『ラリタヴィスタラ』、『普曜経』、『方広大荘厳経』の記述のみである。ガンダーラに流布した釈迦誕生伝説を考えるにあたり、『ラリタヴィスタラ』とその関連漢訳の記述は関連性が高いと考えられる。

第三部　ガンダーラ仏伝図における競試武芸図形成に関する諸問題

第三部は、インドの仏伝美術の展開のなかでは、とりわけガンダーラに顕著となる多彩な競試武芸図の表現に関して考察を行った。序章では、ガンダーラの競試武芸図の各場面を概観した。誕生サイクルとは異なり、競試武芸の諸場面は作例によって順序も様々で、ガンダーラにおける伝承の混在が想定される。対応する内容を伝える文献群を整理しても、順序や内容に異動が大きい。しかしながら、やはり梵本・漢訳仏伝文献では様々な競技が列挙される傾向が共通している点、これらの伝承の成立地を考えるうえで看過できない。そして、釈迦の競試武芸説話に類似するものとして、クリシュナ神話が挙げられる。すなわち、『ハリヴァンシャ』や『バーガヴァタ・プラーナ』にみられる「カンサの誅殺」説話では、クリシュナ神が「弓技」や象を放り投げる「擲象」、「レスリング」を行う説話が認められるのである。もっとも、『ハリヴァンシャ』や『バーガヴァタ・プラーナ』の成立はガンダーラ美術と比較するには後代である。しかし、クシャーン朝のガンダーラとマトゥラーで出土した浮彫に「悪魔ケーシンと戦うクリシュナ」の図像が一点ずつ確認できるため、ガンダーラの仏伝図制作の期間に、怪力を誇るクリシュナ神話はある程度知られており、釈迦の競試武芸説話と相互に関連したとみられる。

第一章では、競試武芸図のうち、「レスリング」図の考察を行った。ガンダーラの仏伝図の作例は数多いが、それぞれの主題の図像はほぼ一定している。しかしながら「レスリング」の図像には複数のヴァリエーションが認められ、その図像の差異には、制作された地域や年代がある程度反映されている。そこで、「レスリング」図について、画面中央で組み合う二人の競技者の図像を、勝者・敗者が明確である第一タイプと、勝者・敗者が明確でない第二タイプに大別して考察した。スワート出土の浮彫には、第一タイプの「レスリング」図の画面中に「水を注がれて介抱される敗者の男性像」が頻出している。この図像を最初に報告したM.タッディは、この「敗者の男性像」がサイドゥ・シャリフⅠやブトカラⅠ出土のガンダーラ美術最初期の作例にみられることを指摘し、ローマ時代の図像と比較している。先行研究では、「敗者の男性像」に関する記述は文献に残っていないとされるが、本章では、『太子瑞応本起経』と『修行本起経』の初期漢訳経典にのみ、「レスリングで気絶したものに水を注ぐ」という記述がみられることを指摘した。一方、作例総数からみれば組み合う二人の競技者の勝者・敗者が明確ではない第二タイプが多く、広域のガンダーラではこの第二タイプが一般的であると考えられる。

第二章では、これまで本格的な研究のみられなかった「擲象」図の考察を行った。競試武芸図のうち「擲象」はガンダーラで初めて図案化されたものである。以降、インド内部では表現が認められないが、中央アジア・中国において造形化され、その作例は「一代記的仏伝表現」との関わりが深い。ガンダーラの「擲象」図は、「デーヴァダッタの撲象」、「ナンダの牽象」、「太子の擲象」という三つの図像から構成されている。最初の場面となる「デーヴァダッタの撲象」図には、城門に塞がっている象が認められるなど説話性が高い主題といえる。「擲象」が物語られる文献を検討すると、梵本と漢訳の仏伝文献十一点がみられ、パーリ語文献には伝えられていない。十一文献の記す内容には異動が大きいが、このうちガンダーラの浮彫にみられる場面の順序や、登場人物の動作に関しても比較的よく一致した内容を記すのは『仏本行集経』であり、本経の訳出年代は隋代とかなり後代であるが、他の主題との関連性も高いことを含めて特筆される。また、梵本『ラリタヴィスタラ』およびその新旧漢訳『普曜経』、『方広大荘厳経』の記述を比較すると、「擲象」説話の拡大・発展がうかがえる。この拡大と発展は、浮彫資料がガンダーラに限られる以上、当地と深く関わるものと考えられる。

結　論

最後に、本研究によって明らかとなった点を述べて結論とする。ガンダーラ仏伝美術の大きな特徴となる「一代記的仏伝表現」について、まず、第一部で行った作例群の検討により、その場面構成がより明確となったとともに、当地における釈迦の成道以前の菩薩時代への関心の

高まりが改めて指摘できた。さらに、「一代記的仏伝表現」の構成において大きな比重を占める「誕生」や「競試武芸」図はガンダーラでどのように成立したのか、また、当地ではどのような伝承が流布していたのかという問題について、「図像の伝承」が「文献の伝承」とどのように関わるのか分析した結果、以下の様相が明らかとなった。

まず、「図像の伝承」の視点からは、当地における宗教文化混淆の様相が指摘できる。従来先行研究で指摘される、ガンダーラ美術にみられるギリシャ、ローマ、イラン美術といった西方要素の分析とともに、本研究ではガンダーラの仏伝図におけるインドの表現伝統やインド文化の影響を重視した。「誕生」図にみられる讃嘆神や、母の右脇腹から生まれる釈迦、梵天・帝釈天といった登場人物の意義や彼らの仕草は、インドの表現伝統を忠実に受け継いでいる。その根底には、「ヒンドゥー文化」と呼びうる精神的土壌の萌芽が認められる。この点は、釈迦の競試武芸説話とクリシュナ神話が類似していることと無関係ではないだろう。こうした図像や神話の受容によって、釈迦の太子時代のイメージは発展したと推測できる。

次に「文献の伝承」との関わりという視点からは、ガンダーラの仏伝美術と関連性の深い仏伝文献を指摘しておきたい。従来は、ガンダーラにおける仏伝図の制作背景については、「誕生」から「涅槃」まで釈迦の一生涯を扱う『ブッダチャリタ』や『僧伽羅刹所集経』の構成や内容が論じられてきた。しかしながら、本研究で分析したようにガンダーラの「誕生」図や競試武芸図の諸特徴に関連性の高い記述は、『ブッダチャリタ』や『僧伽羅刹所集経』よりも、むしろ『ラリタヴィスタラ』と関連漢訳および『仏本行集経』などとよく合致する。ガンダーラの仏伝浮彫からみて、これらの仏伝文献の原形がより早くに成立したことは十分に考えられ、ガンダーラで発展したと想定できる。その背景には、大乗仏教の仏身観、菩薩思想の展開が予想され、今後とも追求すべき課題である。

註

① 周知のごとくガンダーラとは古代の地名であり、時代によりその示す範囲は異なったことが知られる（桑山正進 訳1987『大唐西域記』中央公論社，190-193.）が、現在のパキスタン北部のペシャーワル盆地周辺を指す。しかし、いわゆるガンダーラ様式を示す片岩彫刻の作例が出土する地域はさらに広い。この地域はGreater Gandhāraと呼ばれることが定着しつつあるが、研究者によりその区分は一定しない。本研究ではペシャーワル盆地を中心として、北東部はスワート地方、北はディール地方、北西はバジャウル周辺を限度とし、東はブネールやハザーラ地方、および南東のタキシラ地方周辺を想定する。

② 小谷仲男1996『ガンダーラ美術とクシャン王朝』同朋舎；同2009「ガンダーラ浮彫図の新解釈—末羅力士の移石説話」『史窓』66：128-98等。

③ 宮治昭［1994］2010「インドの仏伝美術の三類型」『佛教芸術』217：15-32.（補訂：宮治昭2010『インド仏教美術史論』中央公論美術出版，186-211.）；Behrendt, Kurt A. 2005. Narrative Sequences in the Buddhist Reliefs from Gandhāra. In *South Asian Archaeology,* 2001, ed.

C. Jarrige and V. Lefèvre, 383-392. Paris: Editions Recherche sur les Civilisations.

④ Faccenna, Domenico, Pierfrancesco Callieri, and Anna Filigenzi. 2003. At the Origin of Gandharan Art. *Ancient Civilizations from Scythia to Siberia* 9-3: 304, 348; Faccenna, Domenico. 2007. The Artistic Center of Butkara I and Saidu Sharif I in the Pre-Kuṣāṇa Period. In *On the Cusp of an Era: Art in the Pre Kuṣāṇa World*, ed. Srinivasan, Doris Meth. Leiden; Boston: Brill, 195.